

県小中学教研会報

発行 石川県小中学校教育研究会
金沢市尾山町10番5号
石川県文教会館内
電話(076)262-4916

編集 石川県小中学校教育研究会
広報部

印刷 株式会社 山 越



石川県小中学校教育研究会第4回研究大会

「オール石川」を胸に



石川県小中学校教育研究会

会長 寺本 弓子

今年度も猛暑の最中となりましたが、八月十日、第四回目となる石川県小中学校教育研究会研究大会を開催いたしました。

石川県教育委員会、石川県市町教育長会をはじめ、日頃より本会の活動を支えていただいております諸機関より多数のご来賓の皆様にご臨席いただき、延べ約六百名の会員の参加のもと無事終了することができました。

石川県小中学校教育研究会は、四年前の平成二十四年に設立されました。石川の子どものために、授業研究の文化を継承するとともに、その成果を県内全域の教職員で共有し役立てたいという諸先輩方の強い思いからの発足であったと聞いております。夏の研究大会も四回目を数えることとなり、設立当初より本研究会の活動にご理解・ご支援をいただいております関係諸機関の皆様改めて深く感謝申し上げます。

今年度も設立以来掲げてまいりましたテーマ「石川の授業研究文化の継承と発展」のもと、午前と午後に分けての開催となりました。

午前は、各郡市町学校教育研究会の代表が一堂に会し、それぞれの研究活動についての報告や意見交流を行いました。

午後の開会式後には、鳴門教育大学大学院教授・村川雅弘先生に「次期学習指導要領が求め

る授業と学校」アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントを中心に」と題してご講演いただきました。次期学習指導要領を見据え、今後求められる授業や学校のめざすべき方向性について軽妙な語り口でご教示いただき、学びの多い充実した時間となりました。

その後、教科等別研究協議会を四つの分科会に分かれて行いました。特色ある八本の実践発表と研究協議を通して、二学期からの授業づくりや授業改善に役立つヒントが得られたことと思われまます。

「明治以来、先輩教師が営々と積み上げてきた伝統的な指導の腕を見つめ直し、必死に継承すべき最後の時機に直面している。それはベテラン教師の使命でもある。」

東京学芸大名誉教授・児島邦宏先生のご提言です（「内外教育」第六四八〇号）。

日々成長している石川の子どものための、若手も含めた県内すべての会員が、教師としての使命感と一体感を持って今こそ真剣に取り組みべき時です。

石川県の授業研究の文化の継承とさらなる発展に向けて、「オール石川」の合言葉を胸に、本研究会への積極的な参画を今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

祝辞

石川県教育委員会
教育長 田中新太郎

本日、「石川県小中学校教育研究会第四回研究大会」が、盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます

ここにお集まりの皆様には、日頃より、本県の学校教育の充実や児童生徒の健やかな成長に向けた取組へのご協力ならびに、その積極的な推進にご尽力いただきまして、感謝申し上げます

さて、現在は、グローバル化や情報化等の変化が加速度的となる中で、将来の予想がますます難しい時代であり、子供たちに、急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために、必要な資質や能力を確実に備えることができる学校教育の実現が求められております

このような現代的課題を受けて、さる八月一日に、中央教育審議会特別部会から、次期学習指導要領の審議のまとめ案が公表されました。その中では、社会に開かれた教育課程、アクティブ・ラーニングの視念に立った授業改善、カリキュラム・マネジメントの確立などが示されております

本県におきましては、平成二十三年に策定した「石川の教育振興基本計画」を、社会情勢の変化や国の動向を踏まえた見直しを行い、本年三月に第二期となる新たな計画を策定いたしました。この計画では、「未来を拓く心豊かな人づくり」を基本理念に掲げ、心身ともに健やかで、自

ら学び、課題を見付け、解決できる力を身に付けた、未来を切り拓こうとする、気概あふれる積極果敢な人づくりをめざすこととしております

こうした中、今回、四回目の研究大会を開催するにあたり、これまで本研究会で蓄積してきた財産を活用するとともに、これから求められる児童生徒の資質・能力の育成に向けた新たな視点を加えて、充実した研究協議をお願いしたいと思います

最後になりますが、本研究会の開催にあたり、ご尽力くださいました関係の皆様に対し、深く感謝を申し上げますとともに、本大会での成果が、小中学校教育のさらなる充実、発展に生かされますことを、心よりご期待申し上げます、お祝いの言葉といたします

祝辞

石川県小中学校教育研究会
会長 野口 弘

石川県小中学校教育研究会平成二十八年第四回研究大会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます

本研究会は、県内で教職に携わっておられる皆様方の様々な要望に応えるために各地域や市町ごとにあった研究団体や研究会を一本化して誕生しました

これにより、全県的な視野に立った研究が推進され、現在までに着実に研究成果が積み重ねられてきています。本研究会の設立に携わった者の一人として、心から嬉しく思っております。さて、本大会のテーマである

「石川の授業研究文化の継承と発展」には、私たちがこれまで大切に育ててきた、教師にとつての財産である「指導力や指導技術」を次の世代に確実に継承し、発展させていくという強い思いが込められていると私なりに捉えています

近年、教員の大量退職による大幅な世代交代が進む中、若手教員が急激に増えています。こうした若手教員の指導力をどのように磨き上げ、どのように質を高めていくかが大変重要な課題となっております。併せて、中堅教員やベテラン教員であっても常に良い授業を追究することも、未来を担う子供たちの指導にあたるものとしての責務です

このような中、先日、新しい学習指導要領の視点が示されました。視点として、子供たちが「何を知っているか、何ができるか」だけでなく、「知っていること・できることをどのように使ってどのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」ということが示されており、そのような資質・能力を身につけて、「課題を見付け、解決に向けた主体的・協働的な学びを行うアクティブ・ラーニング」の導入が盛り込まれています

先にも触れましたが、新学習指導要領のもとにあっても、教師一人一人が自らの指導力をより一層高めていくことは使命であり、そのことはいつの時代にあっても不変です

是非、オール石川という大きな輪の中で、本研究会の活動を通して、幅広い角度から効果的な研修を深められ、石川県の教

職員全体のレベルアップを図っていただきたいと思っております。併せて、本研究会で学んだことが、それぞれの市町に広がり、県内全ての学校で有効に活かされ、深まり、発展していくことを切に願っています

郡市町教育研究会
協議会報告

小松市立那谷小学校
中村 玲子

県内十六郡市町教育研究会の代表者が集まり、活動報告と研究協議が行われた

①小松市教育委員会

「教科等研究会」と「専門委員会」の二部会構成で研修に努めている

教科等研究会では、研究授業を大切に、講師招聘学習会や実技研修も取り入れて専門性を高める実効性のある研修となるよう努めている。専門委員会においても課題を明確にした継続的研究がなされ、市全体の方向性が統一されて、学校間の格差解消に役立っている

課題として、教科等研究会の選択が任意のため、所属人数の差が大きいこと、教育課程の領域において人数の確保が不安定になりやすいことが挙げられた

②鳳珠郡学校教育研究会

奥能登地区二市一郡の教職員が集まり、会員全員による第一群と必要な会員が所属する第二

群の二部会に分かれて研修に努めている

特に小中の連携が意識された研究授業やレポート交流がなされ、九年間を見通した教育の重要性を実感し、学ぶ機会となっている。講演会や実技講習、フィールドワークなど内容が毎年工夫改善されている

課題として、会員数の減少により部会の成立や活動内容が限られることがあり、所属に関するルール作りが必要となっていることが挙げられた

全体協議

会員数が減少している中、若手をはじめ指導力向上のために校内研はもちろん、学校を越えて連携して研修を行う学教研の内容を充実していくことが重要であることが共通理解された。研修の内容が充実するための工夫について情報交換がなされた

グループ協議

「学力向上」「人材育成」をテーマとして熱心な協議が行われた。学力向上の基本は授業力の向上や指導力の向上であることを確認し、授業力・指導力を校内での研修やOJTを通して育成している事例や、学校間連携や郡市町が連携しての効果的な取組事例が報告された

今後も学教研の横のつながりを活用して若手やミドルリーダーを育成していくことが重要であることが共通理解された

さらに、小中連携した研修会の実践を推進して内容の充実を図ることや市町教育委員会との連携も学教研にうまく取り入れていくことが重要であるとの話題が出された

記念講演

『次期学習指導要領が求める授業と学校』

—アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネージメントを中心に—

鳴門教育大学大学院教授 村川 雅弘

○私と授業研究・教育工学

臨床心理に興味があり、心に悩みを抱える子どもを救いたいとの思いで、人間科学部に入学した。学部二年の折に金沢市のある先生の授業ビデオと出会い、子どもが司会をし、子どもが子どもを驚かす姿を深めていく姿に驚かされた。まさに、四十年以上も前にこの地でアクティブ・ラーニングが行われていたといえる。

○指導要領改正の動き

現在、平成二十九年三月の新学習指導要領の告示に向け審議のまとめが行われている。

未来に生きる子どもたちを指導するにあたり最終的に完成した指導要領だけを理解するのはなく、その過程で話し合われた内容を知り、新学習指導要領の背景となるものを押えておくことが重要である。平成二十七年八月に出された教育課程審議会教育課程企画特別部会論点整理からは次の六つのキーワードが挙げられる。①育成すべき資質・能力②アクティブ・ラーニング③カリキュラム・マネージメント④授業研究・教員研修の工夫・改善⑤社会に開かれた教育課程・総合の充実⑥スタートカリキュラムの充実

○育成すべき資質・能力

育成すべき資質・能力は「何



を知っているか、何ができるか」「知っていること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界とかがわり、よりよい人生を送るか」の三つの柱でまとめられている。この三つの資質・能力を育てていくためにアクティブ・ラーニングという学びが必要になる。

○アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングとは、

共通の課題解決に向かってよりよい解を求めて目標を確認しつつ一人一人が責任感の下に自己の考えを持ち協同的・共感的に進めていく問題解決的な活動のことである。どんな問題に出会っても今までの学びを生かし、色々な人とやりとりをし、なんとかしようとする生き方や考え方のできるアクティブ・ラーナーを育てることが重要である。

二年前に中学校の道徳研究発表会を参観して子どもたちの話し合いの深まりに感動させられた。そこには「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の姿を見ることができた。その学校で大事にしていたことは「語り合い五ヶ条」と呼ばれる学習ルー

ルを徹底していたことであった。アクティブ・ラーニングの成立条件を七つに整理している。一つは「受容的な関係づくり」である。自信がなくても自分の考えを出せるようになるためには、それを受け入れてくれる仲間が必要になる。ある学校では教室はまちがうところだという指導を徹底することで何でも話し合える関係作りを行っている。

一つは「問いや教材の工夫」

である。「面白そうだ」「役に立ちそうだ」といった関心や意欲を引き出す問いや教材、多様な考えや対立する意見が出やすい問いや教材の工夫が大切である。

一つは「思考を促す適切な手法」である。最近様々「思考ツール」が使われるが、授業の展開に合致した思考を導く手法を取り入れた。

一つは「言語活動を子どもに委ねる」である。話し合いのスキルカードを活用する等、小学校の低学年であっても経験を積み重ねることで、考え方や話の仕方を身につけていくことができる。

一つは「個人思考と集団思考のバランス関係」である。集団思考の前に必ず個人思考を組み入れた。また集団思考の後には必ず個人思考に戻し、振り返らせたい。

一つは「個に応じた表現方法の多様性の保障」である。文章にしたり話したりする以外でもメモやイラストでもよい。少しでも考えの種になるものを形にしておこうとすることを奨励したい。一つは「正答主義・正解主義

からの脱却」である。自信がなくても思いついたことを必ず書き留める習慣を身につけさせた。



学習定着率を示すピラミッドを見てもアクティブ・ラーニングによる学びは定着率が高いことが分かる。

○カリキュラム・マネージメント(以下「カリマネ」と略す)

総合的な学習の時間や小学校外国語活動、〇〇教育等の導入により、子どもや地域の実態に合わせた特色ある学校づくり、カリキュラム開発の重要性が言われるようになった。

さらに教科学習も含め教育活動全体での対応の必要性からカリマネが重要になってきた。

まず、子どもの実態や将来求められる資質・能力から教育目標を立て、具現化のためのカリキュラムを作成する。

愛知県のある小学校では校長が示したブランドデザインを全職員で具現化するためのワークショップを開き共有している。その上で学級のカリマネを作成している。さらにPTA運営委員会や学校評議委員会等学校の応援団となる外部組織に対してワークショップを開き共通理解の下、学校作りを行っている。カリマネのすごい学校の例を挙げる。東京のある学校は、かつて生徒指導面や学力面で課題を抱えていた。それが学びを支

える「学習のわざ」と呼ばれる学習技能の徹底・定着化や「言葉のわざ」や「教科まなブック」等を使った言語活動の充実を全職員で取り組むことにより両方の課題を解決した。また、研修の機会は「いつでもどこでも」を合言葉に、昼休みに初任研を毎日行ったり、立ったまま「ちょこっと研修」で情報交換や助言を行ったりした。成果物を掲示することで授業改善だけでなく学校全体の改善策を考え共有化を図っていた。

カリマネと言えは学校全体や教育課程のカリマネ、あるいは教科・領域のカリマネを思い浮かべる人が多いと思うが、カリマネの考えを生かして、学年のカリマネ・学級のカリマネを行うことを勧めたい。新任の先生であってもカリマネによる学級経営案を作成し目標達成のためにマネージメントすることが重要である。さらにもっと大切なことは子どもたち一人一人が目標を立て、目標とする自分になるためにどのようにマネージメントしていくか、「自己の学びのカリマネ」ができることである。このようにカリマネを個のレベルまでレベルアップさせていくことが今後求められてくる。



教科等別研究協議会報告

第一分科会

理科(金沢市小学校教育研究会 理科部会 金沢市立米丸小学校 濱田貴宏主幹教諭)

「知識基盤社会の時代を切り拓く人間を育てる理科教育」自然に働きかけ、取得し、活用し、探求する」を研究主題に、「単元を見通した、思考を育てる表現活動の設定」「実感を伴った理解を促す活動の工夫」を重点項目に設定し実践を積み重ねている。ベテラン教師による教材解説会、身近な複数の植物を利用した光合成の実験・大きめのLEDと豆電球を利用した点灯時間の比較実験・台風のモデル実験等教材の工夫により、興味関心が高まり、実感を伴う理解に近づいたという報告があった。



美術(金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 西澤 明教諭)

「二人一人が輝く造形活動」伝える」を研究主題として、県図工・美術教育研究大会金沢大会に向けた取り組みの中で、子ども達により良い学びを実現するため、教師から教師へ「伝える」ことをテーマとしての実践

であった。

公開授業を核としつつ、三名の教員による関連した教材開発、金沢市の中学校美術科担当教員による教材集の作成、外部講師による助言など、様々な角度から「伝える」ことを目指した実践を展開してきた。

第二分科会

家庭科(加賀市立錦城小学校 荒木早織教諭)

「豊かな生活を創り出す子をめざして」を研究テーマとして、三つの柱による実践報告がなされた。①児童の実態に応じたパフォーマンス課題の設定が、児童の実践意欲・態度につながる②児童の実態を十分考慮したルーブリック評価の作成がより客観的な評価につながる③ICTの活用が、児童の思考を深める有効な手立てとなるという研究結果が挙げられた。

生活科(白山市立千代野小学校 竹本優紀教諭)

「子どもが創る生活科」かわり合う中から気付く子をめざして」を研究主題として、次の三つの視点を設けた。

- ①意図的・計画的で組織的な単元計画。
- ②「見つける・比べる・たてる」などの多様な思考・表現活動の充実。
- ③気付きの変容を評価するためのルーブ



リック(評価の指標)の作成。そして「あきのおもちやをつくって、みんなであそぼう」の単元で授業実践を行った。参加者からの質問により、授業の様子が答えられ、おもちや作りでは作業進度の個人差を埋める工夫やめあてを一つに絞る必要性が明らかになった。

第三分科会

特別活動(能美市教育研究会)

「子どもが主体的に話し合い、よりよい集団決定ができる学級会の指導」を研究主題として、実践発表がなされた。

活動計画

ワークシートの活用や板書の可視化といった「①学級会の流れをつかむ取組」、学級会ノートを活用した



「②自分の考えを持ったための取組」、話し合いヒントカードや教師の助言の工夫による「③さらにより学級会の取組」の三観点で取組を整理し、具体的な事例に基づく成果が示された。実践の結果、児童の学級会に対する肯定的な意見の増加のみならず、他の教科でもそのよさが生かされたとの報告がなされ、取組の有用性が示された。

技術・家庭(白山市立北星中学校 守田弘道教諭)

「思考力・判断力・表現力育成のために『読む・聞く』書

く・話す」活動を取り入れた学習活動」を研究主題として、実践発表がなされた。

「校区の海岸を綺麗にするための、防風林育成の松の苗作りという身近な課題と題材の設定」「ワークシートの形式の工夫と、デジタルコンテンツの活用」等の実践の結果により、「考えをまとめ発表する」「他者の意見を聞く」「資料からヒントを読み取る活動が充実したとの報告がなされた。そして課題を解決しようとする意識と、判断力の向上の有用性が示された。

第四分科会

体育(川北町立中島小学校 中野一紗教諭)

全般的な体力・運動能力の向上をはかるため、学校全体での組織的・計画的な実践が発表された。



取組みの内容は、①導入運動の工夫、②業間マラソンの実施、③水泳カードの導入、④スポチャレいしかわへの積極的参加の四つである。様々な運動領域を組み合わせた活動を毎時間授業に取り入れ、系統立てた記録カードを作成することで、児童自らが課題を把握でき、取り組みの成果が見て分かるよう工夫した。楽しみながら運動に親しむ場を設定することで、運

動能力をどの学年も高めることのできた実践であった。

音楽(志賀町立富来小学校 東 由紀教諭)

音楽専科として歌の楽しさを実感させ、音楽であふれる学校にしたいと、全校児童を巻き込んだ「今月の歌」に着手した。朝一斉放送で音楽を流し、複数クラス合同や縦割り班を効果的に取り入れることで、学校中に歌声を響き渡らせることができた。さらに、「今月の歌コンクール」の実施で、歌声を合わせることの良さを実感させた。他にも、「校内音楽環境の充実」を図るための掲示や楽器体験コーナーの設置、「音楽専科ニュース」の発行など。きめ細やかな指導と工夫、情報の発信が、児童・職員の意識を高め成果を上げており、素晴らしい実践だった。

編集後記

「石川の授業研究文化の継承と発展」をテーマに、第四回研究会大会を盛会で終えることができました。

各郡市町教育研究会や教科等の研究団体の取り組みを参加型形式で活発に交流し合い実りのある会となりました。ありがとうございました。

第九号の発刊にあたり多くの皆様のご協力やご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。

(広報部 山本 正美)